
仮面ライダーディケイド～NEXTAGE～

ブラッディ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド〜NEXTAGE〜

【Nコード】

N5908L

【作者名】

ブラッディ

【あらすじ】

？終わらない旅はない。さりとて旅に永遠の終わりも無い。

何故なら生きることとは旅そのもの。旅の終わり、それ即ちまた新たな旅の始まり……？

世界の破壊者、ディケイド。

その旅は、「破壊者という再生者」たる己が使命を果たし、また、悪の組織『スーパージョッカー』を「破壊」することで、ひとつの終結をみた。

しかしディケイドの旅は続く。何故なら旅こそがディケイドの物語、その生きる世界なのだから。

これは彼が、そんな数多の世界で綴る物語のほんの一部分。

それは「ディケイド」という物語の地平の先、新たな世界―NEX
TAGE―で我々を待っている。

破滅の破壊者、ディケイド。数多の旅路の先で、その瞳に撮すものは何か。

□はい、という訳で処女作でいきなりディケイドにトライした大馬鹿者であります。

不備等は、温かい目で御覧頂けると幸いです□

□現在更新停滞中につき御免□

始動・ディケイドネックスステージ

「これまでの仮面ライダーディケイド」

「あなたは旅をしなければならない」

「おのれディケイド、この悪魔め！」

「俺の旅は一体何だったんだ……」

「「士ああつ」」

「俺たちはこれからも旅を続ける」「その旅はやがて、未来を変える」

「通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ！！」

「ディケイド、力を合わせよう！」「ああ！」

「また、世界を撮って下さい」

ある世界、ある町、ある公園。

休日で、様々な人々の声が聞こえるそこで、三人掛けのベンチを占領し、一人熟睡している青年がいた。

整った顔、スラリとしたスタイル。茶色や黒の服に身を包み、首からマゼンタ色のトイカメラをぶら下げている。

彼の名は、門矢 かじや 士 つかさ。

今でこそお間抜けな表情で眠っているが、以前は『世界の破壊者』と呼ばれ、一時は真面目に世界を破壊しかけた、『仮面ライダーディケイド』と呼ばれる人物である。

そんな彼は、諸用——とある柑橘人間に現像代金せがまれた——で、散歩している途中、何となく通りすがったこの公園で惰眠を貪っていたわけである。と——

―ブチッ―

カメラをぶら下げていた紐が、何の前触れもなく切れた。そして、カメラは、音を立てて地面と接触した。

―ガチャン―

その瞬間、風景がセピア色にかわり、うごきをとめた。同時に、「やめろ…対ナマコ薬…海東お…」などと寝言を言っていた士は、銀のオーロラに包まれ、姿を消した。

―そこは、宇宙の様なばしょだった―

「ん…ん？何だ、たった一年なのに随分と懐かしく感じるな」

先ほど銀のオーロラによって姿を消した士は、目を覚まし、伸びをし、今いる場所を確認した後、さして感情の籠らぬ風に言った。すると、

「ようこそ。ディケイド」

かなり聞き覚えのある、そして出来れば二度と聞きたくなかった声。しかし、記憶にあるほど凄みがこもっていない。

「…その声、鳴滝か。久しぶりだな」

若干警戒しつつもそう声を返した士に答える様に、眼鏡をかけ、フェルト帽をかぶった壮年の男が姿を現した。

彼の名は、鳴滝^{なるたき}。前に、度々士達の邪魔をしてきた因縁深い男である。しかし、その表情も、記憶にある様な不気味な笑みを浮かべてはいない。

「どうした？ 声に元気がない様だが。いや、顔もか」

「失敬な。凄みがないで良いだろう」

「で、何の用だ？ ここでおまえを破壊するとか言ったらとりあえずおまえのその面を破壊するぞ」

そう士が言うと、鳴滝は少し微笑む。それもあのニンマリとした恐ろしげなものでなく、どこか自然なものだった。

「いや、今回の私は、君の敵ではない」

「信じられるか。そんなこと」

士は、尚も警戒し言うが、鳴滝は、ことも無げに答える

「別に他意は無い。」この”私は旅の案内人だ。そうでなければ態々こんな所に呼ばずにこちらから出向いて行くだろう」

確かにそうだ。ただ倒すだけならこんな所に呼ぶ意味はない。

「態々お前に案内されなくても俺はずっと旅の途中だ。そこが俺の世界であり、ディケイドの物語だからな」

士は、注意深く目の前にいる男の両目を見つめる。しかし、嘘を見抜く事にかけては自信のある士にも、彼が嘘をついている様には思えなかった。

しかし、そうなると逆に訳がわからなくなるのは士の方である。士には、「ディケイドを破壊しにきた」以外に鳴滝が自分を訪ね

てくる理由は思いつかない。彼はそういう男だ。鳴滝という男は。士が戸惑っていると、背後の空間に、たくさんの地球のビジョンが浮かび上がった。

ソレを背景に、鳴滝は語り出す。

「要因は様々だが、幾つかの世界が再び破滅の危機を迎えている」

「――常日頃だろ。主にお前らスーパーショッカーの余韻だけだな」

それらの地球は、前の時の様な接触こそしなかったものの、各々で次第に壊れていく。

「各世界の崩壊はほぼ同期している。ひとつの流れの中にいくつもの波紋が同時に発生すれば他の流れにさえ影響を及ぼす。壊れた世界は更なる世界の崩壊を呼び、やがて――」

地球が壊れた跡から引力が発生し、さらに幾つもの地球を引き込み、かさなっていく。

「――全てが…消滅する…」

士が引きとって言うと同時に、地球がそこかしこで壊れていく。

「そこで」

「もういい、大体分かった。要は、その世界への旅に出ろってことだろ。そこは大体分かったから早く夏ミカン達の所に戻せ」

「そう、旅立ちだ。しかし、今度の旅先には光写真館では辿り着けない」

「何？　どういう事だ？」

「別の仮面ライダー達の世界と深い繋がりを持ちすぎたからだ。

本来一つの世界に属する写真館や光 夏海・栄次郎、それにクウガ。

それらはディケイドの干渉で無理に異世界と繋がり続けてきたわけだが、既に限界だ。やがて世界は彼等を拒絶する様になる。そうなれば彼らは属すべき世界を失う。既に『世界の拒絶』は始まっている。ゆえに彼等は一度元の世界に戻り、異世界との繋がりを薄めなくてはならない。

しかし君には旅を続けてもらう。だから拠点を変える必要がある」

そこで鳴滝は表情を変える。

「つまり今までとは、旅が変わってくる。それでもやれるか？」

挑発する様に問いかける鳴滝。士はその言い方にムツとしつつ言い放った。

「あたりまえだ。やってやるさ。今まで俺は様々な世界を回り、仲間を作ってきた。夏ミカン達が居なくてもやる事は変わらない。どうせ俺は通りすがりの仮面ライダーだからな！」

力強く言い切った士に、鳴滝はどこか満足気に頷いた。

「では頼んだぞ、破壊者。^{ディケイド}破滅を、破壊するのだ」

頷く士は、再び銀のオーロラによって姿を消した。

（次回の仮面ライダーディケイドNEXTAGE）

「ああっ、俺のカメラがあっ！」

「このカメラ売ってくれ！」

「そろそろ払ってもらおうか！」

「仮面ライダー…ファム…」

次回『始めの世界・借金ファムと取り立てワーム』

破滅を破壊し、次へと繋げ！

始動・ディケイドネックスステージ（後書き）

はい、そういうわけで始まりましたディケイドNEXTAGE。
なにぶん、初めてなもので、御意見御感想頂ければ、誠に幸いです。

では次回「始めの世界」で、またお目にかかりましょう。

始めの世界・借金ファムと取り立てワーム

「これまでの仮面ライダーディケイドNEXTAGE」

「鳴滝か」「何のようだ？」

「世界が再び破滅の危機を迎えようとしている」「崩壊はほぼ同期している」「壊れた世界は更なる世界の崩壊を呼び、やがて――」
「しかし、今度の旅先には光写真館では辿り着けない」「それでもやれるか？」

「やってやるさ。どうせ俺は通りすがりの仮面ライダーだからな！」

ひとけ
人気の全く無い公園。

錆びたブランコのキーキーいう音すらはつきり聞こえ、時間が止まっているかの様だ。

そんな静けさの権化の如き空間に、何の前触れもなく変化が訪れた。

何も無い所に突如として現れた銀のカーテンは、スーっと前に移動し、消えた。そして、その跡には、一人の青年が残された。

「ここが、一番始めの世界か……」

青年・門矢 士は、周りを見渡しながら一言。

「何も無いな」

そう、周りにあるのは、雑木林と、錆びだらけの滑り台とブランコとシーソー。あとは雑草蔓延る砂場だったと思しき場所。人っ子

一人いない。

(何で初っ端からこんなとこなんだ…)

士は早速旅に不安をおぼえた。

(こういう時、ユウスケみたいな五月蠅いのがいれば、多少は、紛れるだろうがな…)

らしくないと思いつつも、つい寂しさを意識する。

とはいえ、ブランコのキーキー音や木のそよぐサワサワという音を聞いていると、何故だか落ち着いた気分になる。ふと、前を見てみれば、「撮って下さい!」と訴えている様な絶景が、眼下に広がっている。

「ま、何とかなるだろ。とりあえず、この俺を待っていたかの様な景色に応えてまず一枚」

何時ものマイペースを取り戻し、シャッターを切る。

否、切ろうとしたが。

「な、ななな何!? か、カメラ…。何処だ!」

何時も胸元にあるカメラがない。
軽く焦って辺りを探す。

十分後、足元にあるのを発見。

「…俺、一体どうしたんだ…」

一人、弦き、氣を取り直してシャツターを切る。

シャツターをおろした瞬間に、レンズが飛んだ。

ディメンションキックの様な、鋭いフライングである。そのままレ
ンズは、雑木林の辺りに着陸した。

さらに、あろうことか、カメラの底がメリツと音を立てて落下した。

何の偶然か、キーキーもサワサワも止んでいた公園に、カラン、と音がこだまする。

その刹那、一時停止した土の手の中で、トイカメラは、バラバラに分解した。そりゃあもう、見事にバラバラに。

ここまでの酷使に、鳴滝に会う直前、紐が切れて落下した際のダメージがとめとなったのだろう。

ある意味士の相棒とも呼べた、『black bird, fly・ピンク』の二眼レフトイカメラは、粉碎した。

—ヒュウウウウ…—

真つ白に石化した土に、風が無情に吹き付ける。

「えっ、エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ
エ！？ ウソだろっ！？」

士は、柄にもなく物凄い絶叫をあげた。

マジかよ！？あり得ねえよ？これ付けたまま戦ってたんだぞ！？
投げたりしたって形保ってたんだぞ！？今更なにぶっ壊れてんだ！
？跡形もねエじゃねえか！！

士の心の中では、いろいろな事がグルグルグル廻っている。そして、最終的に士は両膝を地に落とし、両手を地につき、絶望を全身で体现したorzポーズをとった。

雑木林の中を一人の二十歳前後の女性が掻き分け掻き分け進んでいた。

その女性は、無表情だが、整った顔立ちをしている。しかし、その無表情の上からも、楽しそうな様子を感じ取る事ができた。暗色系のピシッとした服装である。

目的地はこの先にある公園だ。あの荒れた公園は、以外と高所にあり、写真を撮るには、絶好の場所なのだ。

そのまま進む事数分、そろそろ到着というとき、声が響いてきた。「えっ、エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！？ウソだろっ！？」

どうやら先客がいたらしい。

しかも、今の声から察するに、結構切羽詰っている様だ。

最後の一掻き。そこで開けた風景は、いわゆる？イケメン？と呼ばれる様な部類の青年が、粉碎したカメラを前に跪いているという、中々にシュールな光景だった。

絶望を全身に感じながら固まること数分。

流石に馬鹿馬鹿しく思えてきたので顔を上げる。

自分を引き攣った表情で凝視している女。

――完全に目が合った――

士は、物凄い速さで立ち上がり、何時もの興味なさ気な表情を顔に貼りつける。その速さたるや、まるでクロックアップしたかの様であった。

「何か用か？」

――おい、世界中の人々よ！俺を誉めろ！あの空気から無表情で言い

切ったこの俺を誉め称えろ！――

「あんたと同じ」

しかし、相手も全くの無表情をアクセルファイズのごとき速で作り上げ、そう答えた。お互い強者である。

「俺と…同じ？」

――俺の用は世界を救うため、世界を旅すること。同じって事は、少なくとも旅人って事に…まさか敵！？――

考えこむ士に一瞥を送り、彼女は士の方へと歩み寄る。警戒し、一歩下がり、身構える士。

しかし、彼女は士の前を通り過ぎ、眼下の雄大な街景色に目を送り、鞆からよく手入れされたニコンF型のカメラを取り出し、構えた。そして一言。

「写真。景色良いもんね、ココ」

士は脱力感を感じた。かなり盛大に。

どうやら、カメラを失って多大なる精神的ダメージを負っていた士は、ユウスケみたいなのはやとちりを展開していたらしい。

なんか気まぎれになった士は、彼女の視線の先にある街景色を見る。見れば見るほど絶景である。

何時もの癖で、シャッターを切ろうとする。しかし、カメラは今やクズ鉄の山。

「ああ、俺のカメラが…」

思わず情けない声が漏れる。

すると、眼下の景色を写真に収めていた女性がこちらを見、次いでバラバラになったカメラを見、目を見開いた。そして、これまたクロックアップしたかのようなスピードで土の目と鼻の先に現れる。

「おい！薬物乱用者並に目がイッチまってるぞ！よるな！離れろ！」

土は悲鳴を上げるが、目の前の、イッチャってる女性は、聞く耳持たずで捲し立てた。

「こここここれは！：あー、なんかバラバラになってるけど、b l a c k b i r d , f l yの十周年限定ピンクモデル！^{ディケイド}たった十台しか存在しないスーパーレアカメラ！ああ、このトイカメラの形を残しつつ、鮮やかなマゼンタを殺さないボディ！素晴らしい！ねねね！？これ、どうせバラバラなんだからいいでしょっ！？このカメラ売ってくれ！！」

初めて見た時と余りにもギャップのある剣幕。捲し立ててる側の女性自身も恥ずかしい事この上ないだろうに、真っ赤に興奮して言い募る。それはさながら鬼のよう。

—うわ、恐っ！—

土は初めて夏美以外の女性に恐怖を抱いた。おなじ鬼でもモモタロスやなんかの比ではない。

さらに捲し立てるこの女の声を、土は若干震えながら聞き流していた。

「——お代は」

「現金でとっとはろてもらおか！」

あえて言うが、士ではない。

いつのまにか、雑木林の辺りに黒スーツ・黒サングラスの、体格のいい強面オッサンが十人程いた。

一瞬借金持ちがこの世界での自分の役目かと思った士は、その声がこの、目の前にいる女に向けられている事に気づいた。

「またあんた達？」

さっきとは比べるのも阿呆らしく感じる程の温度差声。

「金ないよ」

「「いやちよつとまて！」」

さらっと言った女に、思わず取り立て屋連中のリーダーらしいのと士が同時にツッコんだ。

「お前たった今俺のカメラ買いとうとしてたろ！？」

「あんた今そこの兄ちゃんからカメラ買おてしてたやろが！」

打ち合わせしてたのかと思う程息ピッタリなツツコミ。

「ええ加減はろてくれや。何ならあの古ぼけた店、質に入れてもええんやで」

言いながら歩み寄る取り立て屋連中。一般人なら即座に逃げ出す迫力だ。しかし、士はこれまでいろんな化物と戦ってきたので、今更怯える程では――

―バキヤツ―

取り立て屋連中の方向から聞こえてきた破損音。ソレは――

「ああっ！俺のカメラがあっ！今更原形止めてないけど！！」

士の悲鳴。取り立て屋連中が踏み壊したのは、瓦解した士のカメラだった。と――

「――赦さない――！」

声が聞こえてきた。その主はあの借金女性。

「じゃあかしわ。もうええ。こうなったら人身売買でもはろてもらうからな！」

取り立て屋連中のリーダーが言った刹那、他の奴らと共に、人のものとは思えない奇声をあげ、体が盛り上がり、丸みを帯び、禍々しい模様の緑色の生命体に姿を変えた。それをみて、士が反応する。

「何！？あいつらワームだったのか！？」

サナギ態ワーム達は、奇声をあげながら、ゆっくりと距離を詰める。

士は、自分の変身アイテムを取り出そうと、懐へ手を伸ばす。そのとき、

「だからどうしたあああああああ！」

あの女性が叫んだ。

士がそちらを見ると、彼女の手には、白く、薄い直方体がある。

彼女は、長方形を持たないほうの手で鞆から手鏡を取り出し、地面に叩き付ける。当然鏡は派手に割れる。

―ガシャン―

叩き付けた本人は、鬼神の如き迫力で、その場にいた全員が震え上がった。

彼女が割れた鏡に手に持つソレを突き出すと、粉々の鏡に映った彼女にメカニカルなベルトが二転三転して装着され、不思議な事に、現実の彼女にもベルトが装着されていた。

ワーム達をキッと睨みつけ、一言。

「変身！」

言いながら、ポーズ皆無でベルトにソレを装？する。

すると、騎士の虚像が彼女の左右に現れ、二転三転して彼女に重なった。

――ソレは、ある世界で『カードデッキ』と呼ばれる、『ライダーシステム』の一つ。白きデッキのライダー。すなわち――

「仮面ライダー…ファム…」

白鳥と契りし鏡の騎士、ファム。

（次回の仮面ライダーディケイドNEXTAGE）

「なんでファムが借金持ちなんだ？」

「夢だから。私と父の」

「通りすがりの仮面ライダーだ！」

——KAMENRIDE DECADE!——

次回『ファムの夢・父の夢』

破滅を破壊し、次へと繋げ！

始めの世界・借金ファムと取り立てワーム（後書き）

てなわけではなかったでしょう。個人的な勢いで書いてるので読みにくいかも知れません。てか、会話少な！キャラ違っ！
：がんばります。

改訂6／29 4..43

ファムの夢・父の夢（前書き）

やっと書き上げました。

展開は決まってるのに文にするのがこんなに大変だとは。

いろんな方々、普通に悪い点とか書いてすいませんでした。

ファムの夢・父の夢

〱前回の仮面ライダーディケイドNEXTAGE〱

「ウソだろっ!？」 「俺のカメラが…」

「どうせバラバラなんだからいいでしょっ!？ このカメラ売ってくれ!！」

「現金でとつとはろてもらおか！」

「だからどうしたあああっ！」 「変身！」

「仮面ライダー…ファム…」

士は呆氣にとられていた。

―白鳥の要素皆無だったろうが、こいつ―

実際、まあ美人ではあった。

しかし、カメラを買い取ろうとしてきた時の目のイカレ具合や、キレた雰囲気は、寧ろ『王蛇』に近かった。…因みに、士には、王蛇に会った記憶は無い。どうやら、オルフェノク等と同じく知識の中にある様だが、憶えている。

兎に角、白い姿に銀のベルト、その中心の白いデッキには白鳥をモチーフとした金のレリーフ、そのレリーフと似た形のマスク。総計して、高貴な印象のライダー、ファム。たおやかに立つ彼女に吹く風がその背に纏うマントをはためかせる。

対して、緑で禍々しい印象のサナギ態ワーム達は、中腰になり、ファムと睨み合い、互いに動かない。と――

「お前らあああああああつ！
私のカメラをよくも踏み潰したなあああああつ！全員纏めて突き墮としてやるううううううつ！」

「お前のじゃないからな」

高貴な印象なんぞ知るかと言わんばかりに叫んだファムに、色んなツツコミを押し殺してただ一箇所のにみツツコむ士。

「私んだああああああつ！」

叫び、ファムはベルト『Vバックル』に納められているデッキからカードを取り出し、手に持つ白鳥が翼を閉じた様を模したサーベル、『羽召剣・ブランバイザー』を操作して翼を開き、カードを挿入して、翼を閉じた。『ベントイン』と呼ばれるこの一連の操作の後、バイザーは男の機械音声で、カードを読み上げる。

――SWORD VENT――

そして、ファムの手には、その契約モンスターの翼の一部を模した薙刀『ウイングスラッシャー』が飛来した。

―シンシンシン…―？

―ドゴッ―

―シュピーン―

はじめの音は得物が飛来する音。

最後の音は得物がファムの手に入った音。

で、真ん中の音は――

「理不尽な…」

——士にファムの得物が直撃した音だった。

士は白眼を剥いて前に倒れ、眩きながら意識を手放した。

——どこぞの宇宙の様な場所——

「おのれディケイド、お前が気絶したせいで私はまたこんな殺風景なところに来ねばならないか」

どこか不機嫌に彼は言った。

「別と呼んでないけどな。ってかおのれディケイド、じゃ無いだろ鳴滝い！何なんだあの女は？世界崩壊を止める旅で何で借金女と遭遇したんだ俺は！？」

士は、激しく苛立っていた。

まあ、結構恥ずかしい格好で遭遇し、その脅迫めいた商談にビビり、正体に呆れ、拳気絶させられたのだ。士でなくとも怒るだろう。

「しかし、あの世界も崩壊を進めている。君にやって貰わねばな」
「だとしてもあのファムは関係無いだろう？大体何だあの変貌は！？」

納得いかねえと全身で訴えてるようだ。

「彼女は、カメラに対して異常な執着を——」
「そうだカメラあッ！！」

変貌のことを解説しようとした鳴滝の「カメラ」というと言う単語に反応してブチキレた。

「カメラだよカメラアッ！何で壊れた！？お前か！？やっぱ俺が気に食わないからか！？それともヤツか？海東かそうかあいつかアアッ！」

「落ち着けディケイド。おまえの方が遥かにぶっ壊れているぞ。大體紐がほつれてきているのに気付かないお前が悪い。どの道あのベンチでお前が寝返りうったらそれでお前はカメラの破壊者だったな」「もおういいッ！大體わかったッ！！」

ソレはわかったから、何であんなファムと遭遇したアアッ！？」

士の自己破壊は止まらない。

「分かった。それは、だな…」

「さて、30秒待て。落ち着いて聞きたい」

士は数回深呼吸をする。鳴滝は、（おのれディケイド。さつさと戻らないか）と心の中で文句を言っていた。

暫くして、士は何時ものけだるげな表情に戻った。

「よし、もういいぞ」

「ならば話そう。で聞いたらさっさと戻ってくれ」

「わかったから話せ」

「何故あのファムと遭遇したか。彼女が持つあるカメラが、この世界の崩壊の鍵となるからだ。そういう事だ」

「カメラ？何でカメラが？」

「それはディケイド、君が己で調べる。どこへ行ってもそうだっただろう」

「ああ、大体わかった。

俺としては要は、ファミが世界の鍵である事を確認したただけだ」

「じゃあ、すぐに戻れ。旅は始まったばかりだろ？」

「あたりまえだ。じゃあな、鳴滝。暫く会えなきゃいいな」

全くだ、と言いながら彼は少し微笑み、銀のカーテンに姿を消した。

それを見届けた士は、同じく銀のカーテンに包まれ姿を消した。

―ブロロロ：―

士は、走行中の車内で目を覚ました。

どうやらワゴンタイプ車車内の後部座席に寝かされているらしい。頭に包帯が巻かれている。

周りを見渡してみると、粉々になったMyカメラは、なんか透明で丈夫そうな箱に後生大事にしまっており、助手席においてある。それについて士は思う。

―シートベルトまで付けて固定しなくても：―

運転席は真ん前で、そこにいる人物が誰か、寝かされているアングルからでは誰か分からない。

「ふぁゝあ。ウェイクアップってか？」

士、とりあえず目覚めた公表に欠伸と一声。

その時、運転席に座っている人物がピクリと反応した。そして、心配そうに、しかしややぶっきらぼうな調子で聞いてきた。

「大丈夫？ いたくない？」

士もぶつきらばうに答える。

「ああ、かなり痛い。よって大丈夫じゃない。それより免許持ってたのか、借金ファム」

「うん、まあ。あと借金ファムは失礼だ」

「と言っても、俺としては何と呼んで良いかわからないからな」

「…ミホ。名前は飛鳥^{あすか} ミホ」

「ほう、さっきとはエラく違って殊勝な態度だな。

つと、俺は門矢 士。通りすがりのかめn：ラマンだ。覚えておけ」

本当なら何時も通り「通りすがりの仮面ライダーだ」と名乗っているところだが、先に本名を名乗られたのでこちらも本名を名乗っておいた。こう見えて士は紳士なのだ。

通りすがりのカメラマンということにしといたのは、ただ単に「ヒーローはそう簡単に正体を名乗らない」という独自の美学が理由だ。

それは兎も角、その女性、もといミホは、かなり申し訳なさそうな顔をしていた。

「えと、すまん。私、カメラ好きで、何時もいいヤツ見つけたらテンションおかしくなって、結局暴走してしまうわけ」

やはりぶつきらばうな調子だが、心の底からの言葉なのは士には真摯に伝わってきた。

「あのとき、お邪魔虫を全部倒した後、アンタが倒れてるの——っていうか、私が倒したの——を見て、正気にもどって、この車に運んだ。とりあえず私の家に行くから」

「救急車呼べよ」

「やだよめんどくさい」

「お前な…」

「…まあいい、どうせ連れ込んで本格的にカメラ口説き落とす気だろ」

「ま、まあ、それも三割強」

意外に正直者且つ優しい性格の様だ。

飛鳥宅は、住宅地郊外にあり、余り地域交流は望めなさそうな感じだが、一人で住む分には静かで気楽な良い所だろうと察しはついた。

意外にデカく、レイアウトはクラシックな雰囲気だが、オシャレ要素も押さえており、士好みな感じだ。これを見て士は、

「確かにこいつは住宅地にはあわないな。しかしこの俺、門矢士にはお似合いだぜ…」

なんてナルシストな事を考えていた。

ふと、この建築物のかなり大きめのドアに看板がかかっていた。そこにはこう書いてある。

——『白写機本店』——

「『はくしゃきほんてん』？何だあのファム、何かの店でも持ってたのか」

士が呟くと、

「『ましろしゃきほんてん』。一応カメラ屋。あと『本店』っていうのは語呂がいいから父が付けた」

ミホが回答しながら鍵を開ける。そこでふと気付いて土は問うた。
「って、若い女が男を家に気軽に入れていいのか？襲いかかられたらどうすんだ」

問うと相手、ミホはこう答えて来た。

「あんた：たしか門矢だっけ？あんたみたいな優男が仮面ライダーたるこの私に勝てる訳無いでしょ？あんた何様のつもり？」

完全に見下している。

そして、ユウスケ並に目の前の女は又けているらしかった。
ワームを知ってる時点でなにかに気づけてんだ。

士には、こんなファムぐらいすぐ倒せる自信がある。むしろお前こそ何様かと。ふざけてると破壊するぞと。

しかし、士は耐えた。主役はこんな挑発に負けられない。やられてたまるか。

「ま、お前はそういう対象にはなり得ないけどな」

態とどうでもいい風に流す。ミホは気を悪くした様だが、特に何もツツコまなかった。

士はそう言ったものの、実際ミホは外見だけなら美人の部類に入ると思う。艶やかな黒の長髪、シャープな顔立ち、ファムにピツタリの白い健康的な肌。スラリとしたスタイルだが、出るところはそれなりに出ている。

——どこぞのミカンとは大違いだな——

士はそのミカンが聞いたら笑い死の刑に処される様な事を考える。ふと意識を現実に戻すと、ミホは立ち止まっている士を不振に思っただか、振り返っている。

「どうした？」

「いや、何でも無い」

そういうと士は颯爽とミホをぬき、建物に入った。

——白写機本店——

士は店内の風景に言葉を失った。

何しろ、カメラが士の二倍程の高さの棚に所狭しと並び、且つそんな棚がまた所狭しと並んでいるのだ。

カメラだらけの棚に脅されてる様な錯覚を覚える。

様々な種類のカメラ。幾つかはダブっている。トイカメラは数種類あったものの、士のと全く同型のカメラは一つもなかった。

「なるほどな。この風景の一目で大体わかった」

士は軽くこの景色を見渡した後、納得した風に言った。それにミホが反応する。

「なにが？ 私が門矢のカメラを気狂いする程欲しい理由？」

「まあ、それもだが、寧ろ何でファムが借金持ちなんだ？ のほうだな。判ったのは」

まあ、たしかに一目瞭然ではある。

「どう見てもカメラの買い過ぎで金が無くなったろおまえ。で、コレクションを増やすために俺のカメラを欲しがり、挙げ句撲殺未遂ってわけだ」

士は眈々と自信満々で言い放った。

「：門矢。おまえも実は判ってないな」

ミホは少し悲しそうに言った。

「皆、どいつもこいつも私の事只のカメラオタクだ、趣味に走り過ぎて経済破綻したバカだと言う」

士は瞠目した。

―…思いのほか重い方向に話が進んじまったな―

そんな士を余所にミホは語り出す。

「これはさ、夢、なんだ」

ミホは語り出した。

「父の夢は、世界中のカメラを集めて最高のカメラ屋になる事だった。父はバイトを幾つも毎日掛け持ちして、夢のために一直線だった。どんなに疲れた顔してもカメラの事、凄く楽しそうに私に語るんだ。『カメラは人の記憶の拠り所』だとかさ。私もカメラが好

きになった。順風満帆だったんだよ。あの頃は」

そこまでは遠い目をしていても、懐かしい、楽しいと言った感情があった。

「けど…」

不意に顔が曇った。

士は段々饒舌になっていくかたまりを黙って聞いていた。母親が出てこない事に気がついたが尚も黙っていた。

「ある日、突然母が家に来た。ゾツとする様な無表情でさ。その時私は突っかかったよ。今更なにしに来たのって。でも父は怖がってた。何でだと思う？」

ミホは不意に士に聞いた。

「さあ？何かのトラウマだったとか？」

真面目な顔だったが、少しふざけた。士の真の答えは違っていた。自分の考えが外れていればと思った。しかし…

「ある意味当たり。」

私は全然知らなくて、あとで父の日記で知ったんだけどさ、母は父の目の前で、カメラ絡みの怨恨で殺されてたんだよ。父は自分の夢が母を殺した事、母が恨んでるんじゃないかってずっと怖がってたみたいだった」

ミホは続ける。

「お父さんはお母さんに土下座して謝ってた。そしたらお母さんは微笑んだから、許してくれたんだと思った。

でも違った。その時お母さんの体がいきなり怪物になった」

「…ワーム、だったのか？」

『父』『母』が、『お父さん』『お母さん』に変わっていたが、士は敢えて触れずに聞いた。

「そう。そいつは、お母さんに擬態して、お父さんの、あるカメラを狙っていた。お父さんが一番大切にしていたやつをさ。

私の目の前で、お父さんは肉塊に変わり果てた。

そこで、何か声を聞いて、気付いたら倒れてこれを持っていた。その時私は約束したんだ。お父さんの夢は私が実現するって」

ミホはデッキを示しながら話した。

「…話が十分それたね。

結局なにが言いたいかと言うと、借金塗れなのは、カメラに情熱を注いでいて、それは、夢だから。父と私の。っていう話」

話し終わったミホは、カメラを磨きだした。丹念に、心をこめて。何とも言えない表情をしていた士は、不意に口を開いた。

「何でそんな話を会って間もない俺に？」

純粹な疑問。そんな重苦しい話を何故会ったばかりの俺に。士の疑問も尤もである。

しかし、ミホはこう答えた。

「わかんない。カメラが壊れて跪いてたのに父を感じたのかもしれ

ない。あの人、カメラにちっちゃな傷がつくだけで大袈裟に落ち込んでたから。似てたんだ、なんか。だからかな、只、なんか無性に話しかかった」

士はそう言った彼女の表情に見覚えがあった。

—こんな表情：夏ミカン達と旅を始めたところに同じ様な顔をしてた奴がいたような：ああ！ここまで出てんだけどなあ！—

士がそんなことを考え、ミホがカメラ磨きを再開したとき——

「チーズ。お邪魔するぜ、飛鳥さん」

——無粋な声が横槍を入れた。

士とミホがそちらを見ると、黒スーツのゴツい男たちがいた。合計15人と言ったところか。

ミホは咄嗟にデッキに手を伸ばすが——

「おっと、動くなよ？動いたらこの兄ちゃんの頭は向こう側が見えることになるぜ？」

と言って男が取り出した銃が士を指し、ミホを止める。

別の男がニヤニヤしながらミホに近づく。

「なあ、飛鳥さん、俺達もこんな事はもう止めにしたんだぜ？取立てに行くたび仲間が殺られてさあ。な？金が無いなら例のカメラを出せばいいだけなんだからさ？」

ミホは焦っていた。

自分一人ならなんとかできよう。なんとかだろう。

しかし、門矢が居ては、戦いに巻き込んでしまう。最悪無関係な彼が死んでしまうことになりうる——まあ、さっきは自分が撲殺するところだったのだが。

ミホが考えているとき、突然士が動いた。後ずさるわけでもなく、スマートに立ち上がる。

当然男は反応し、士に銃を向ける。

「っ！動くなっ！」

—ガァアンツ—

響く轟音。しかし、士は人間業とは思えない速さでサツと身を屈め放たれた銃弾を避けると、啞然とする男にバツと近付き、華麗な蹴りで男の手から銃を蹴り落とす。

突然の動きに呆然となる一同に向かい、士はこともなげに言う。

「ふっ。おいおい、主役の相手には役不足じゃないのか？」

プレッシャー皆無の声色。

おもむろに彼は内ポケットに手を突っ込む。

蹴られた男は手を押さえながら目を細め、士を注意深く見る

「貴様、何物だ」

それには答えず、士は割とシンプルな白いバックルと、斜めに黒線の入った白本の様なハードケースの様な物を内ポケットから取り出す。

それを持ち、士は口を開いた。

「ひとつ聞くぞ？おまえらは人間か？」

対し、男は呻る様に言った。

「誰だか知らんが後悔しても遅いぞ！」

『ングゲャアアアアアッ！』

ドスの効いた声を最後に彼等は一斉に変貌した。
同時に士も流れる様に動く。

手にもつ白いバックルを下腹部にあてがうと、ソレから灰色のベルトが伸び、腰に固定する。

さらにハードケースのようなものをベルトの左腰に取り付けると、それを開き、バイクのエンジン音の様な音を轟かせて一枚のカードを取り出す。

それら一連の動作はまさに流れる様に行われ、ほんの数秒のことである。

相手に見せつける様にカードを構え、士は冷静に二言三言告げた。

「やれやれ。身の程知らずな奴らだな。

知らないなら教えておいてやる。俺は通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ！」

カードがビシッと返され、バーコードのようなクレストの描かれた裏を向く。

それを士はベルト、『ディケイドライダー』に乱暴めに挿入する。

——KAMEN RIDER——

機械音声が告げ、待機音が鳴る。

士は親指から人指し指までを使い、サイドレバーを包む様にこれまた乱暴めに閉じる。

――DECADE!――

機械音声が告げる。

次の瞬間、士の周囲に灰色の九つのクレストが現れ、それがモザイクで構成された9の戦士の人影に変わり、士と重なる。そして、ベルトから射出された7枚の鮮やかなマゼンタのカードが顔に刺さり、戦士の全身にモザイクに包まれるようにマゼンタが走る――

目にも鮮やかなマゼンタと、白、黒で構成された姿。顔に7つのラインが走り、所々に10を示すローマ数字『X』が見て取れる。明るいグリーンの眼が燦然と輝く。

ディケイド
破壊者が、この世界に降臨したのだ。

ただ立っているだけで恐ろしい威圧感を発し、ディケイドはワームらを見る。

知らず知らず後退りするワームたち。

と、ディケイドが声を発した。

「ま、程々に暴れるか。まずは…」

言って彼は左腰に装備されている白いゴツい本の様なアイテム『ライドブッカー』を開き、例のバイクのエンジン音を響かせてカードを取り出す。

それを見せ付けるようにクルリと回転させ、ベルト『ディケイドライバー』に挿入し、サイドハンドルを閉じる。

――ATTACK RIDE――？

――ILLUSION――

すると、ディケイドからモザイクで構成された人影が2体現れ、それらは一瞬でディケイドになり、3体のディケイドが並びたつ。

「少人数指導だ。行くぞ！」

真ん中のディケイドが言うと、左右のディケイドはライドブッカーを操作する。右のディケイドはソードモードに、左のディケイドはガンモードそれぞれ変形させ、真ん中のディケイドがミホに声を掛ける。

「見てろ借金ファミ。これが俺の力だ！」

割と格好よく言ったのだが……

「ちょっと待て！やるなら店の外でやってくれ！頼むから中でやらないでくれ！」

ミホは必死に懇願する。

「……調子狂うな」

呟きながらディケイドたちはワーム達に走り寄り、素早く15体全部に蹴り込み店外に吹っ飛ばす。

ディケイドたちは並んで態勢を立て直そうとしているワーム達を

見遣り、真ん中のディケイドが振り返り、後ろのミホに問う。

「これでいいんだな？」

ミホが頷くと同時にディケイドたちは各自手をパンパンと払い、刃をシャツと撫で、銃をクルリと回し、ワーム達を攻撃し始める。

真ん中にいる本体がワームに殴る蹴るの応酬を見舞い、ライドブツカーガンモードを持つディケイドはひたすら連射し、同ソードモードを持つディケイドは擦れ違いざま斬りつけ、向き直りながらさらに斬撃を見舞う。

ほどなくして3体が爆散し、ディケイドたちは元の位置に戻る。

そして

ディケイドたちはカードを取り出しベルトに挿入する。

—— ——— ATTACK RIDE ———
—— SLASH ——— BLAST ——— INVISIBLE
E——

3つの機会音声が告げ、ディケイドたちは駆け出していく。

すると、ディケイドが駆るライドブツカー・ガンモードの両隣にはガンモード状の像が2つずつ現れ、放たれる弾丸はピンクのカード状、5倍の弾数になる。

あるいはディケイドが振るライドブツカー・ソードモードの刃はピンクモザイク状の6枚になり、繰り出される斬撃はワームたちを散々に切り捨てていく。

そして真ん中のディケイドは忽然と消え、ワームたちを思いも寄らぬ方向から襲撃する。

ワームたちは、斬られ撃たれ、或いは不可視から打たれ、圧倒されていく。

さながらイジメの様な風景。

やがてディケイドたちは集まり、各々全く同じカードを取り出す。描かれているのは金色のバーコードのようなディケイドのクレスト。それを3人のディケイドは、一糸乱れぬ同じ動きで相手に見せつけるように手の中で回し、ピシッと構える。

ベルトは開かれ、『カード』を迎え入れる。

――――FINAL ATTACK RIDE――――

待機音はワーム達の最期へのカウントダウン…。

――――DE DE DE DECADE!――――

3つの機会音声が告げ、3人のディケイドの前に、金色の、ディケイドより少し大きいサイズのカードがホログラムの様に縦に十枚並ぶ。そのホログラムはディケイドのライダーカードの裏面に酷似していた。

ディケイドたちは、1人は空へ跳びあがり、1人は剣を構えて中腰の態勢を取り、1人はカード群越しにワーム達に銃を向ける。

そして、破壊者は動く。

「はあああああああつ！」

跳び上がったディケイドがカードを蹴破り貫通していく毎にディケイドは加速していく。剣を構えたディケイドがカードを貫きながらワーム達へと肉迫する。あるいはディケイドが発射したエネルギーはカードを撃ち抜きながらエネルギーを増していく。

やがて、ディケイドの力はワーム達に接触した。

『ディメンションキック』『ディメンションスラッシュ』『ディメンションシュート』。ディケイドの誇る3大必殺技を受けたワーム達は全て爆散した。

手についたゴミを祓うように手を払い、あるいは刃を撫で、あるいは銃をクルリと回すディケイド達。その内2人はピンクのモザイクになり、消滅した。

「なるほど？ 厄介ね」

この世界のある巨大ビル。薄暗いオフィスの様な部屋で、女性が一人パソコンに向かっていた。妖艶という言葉を擬人化したかのようなすごい美人である。

そして彼女はニヤリと唇を怪しく歪める。

「ディケイド、この世界に居ない、いてはいけないイレギュラー。けどなんであれ邪魔はさせない。あのカメラは私が貰い受ける。――あれは我々ワームの栄光へのレッドカーペットなのだから」

彼女は一台のモニターに写る戦士――世界の破壊者――を見つめながら壮絶な笑みを浮かべた。

（次回の仮面ライダーディケイドNEXTAGE）

「おまえは危険だ！」

「言ったじゃない？」 「カメラを渡してくればなにもしないって」

「こいつのカメラにはこいつとその父の夢が詰まっている！」

「こいつらは私が突き堕とす！」

次回『燃える白鳥のカメオタ』

破滅を破壊し、次へと繋げ！

ファムの夢・父の夢（後書き）

改訂6月17日。ディケイドの戦闘シーンまで追加。

んゝ戦闘シーンいれてはみたが、迫力が無いな。
次の対ラスボス戦闘シーン大丈夫だろうか。

更に改訂6／29 4…49

はい、こんなんですが、御意け（略待ってまああすっ？
ブラッディ

燃える白鳥のカメオタ（前書き）

ああああ、やっと書き終えた！

申し訳ありません。

超遅れました。

しかも遅れた上相変わらず読みにくいと言う…

根気強くお読み下さい。

燃える白鳥のカメオタ

〽前回の仮面ライダーディケイドNEXTAGE〽

「…ファム…」

「カメラを集めるのは父の夢だから」

「久々に程々に暴れるか」

―― DE DE DE DECADE! ―――

「カメラは私が貰い受ける」

――

『ILLUSION』のカードで現れたディケイドの2体の分身はモザイクで構成された人影に変わった後に消えた。

ディケイドがサイドハンドルを引くと本体もモザイクに変わり、分身するように2方向に分かれて消滅、その場には士が残った。

何時ものやる気無さ気な顔で振り返る。

「さて、とりあえず親玉を探しについておわっ!? なにっ何しやがる!?!」

が、振り返った先にミホはおらず、代わりに突如としてファムが羽召剣『ブランバイザー』で斬り掛かってきた。士が言葉を投げかける。

「何のつもりだっ!? おい!」

「黙れ!」

しかし士の話術も、投げかけた言葉を相手がキャッチしなければ使えない。

士はファムの斬撃を躲しながら、ついさっき変身を解いたばかりだというのにカードを取り出す。

「クソっ！変身！」

――KAMEN RIDE――
――DECADE！――

「なんだどうした！おいっ、ちっ、とりあえず落ち着け！っく！」

ディケイドが声をかけるがファムは聞かず、割と防ぎにくい突きを連発してくる。かと思えば鋭い斬撃を繰り出し、舞う様に接近して来て間合いもとれない。

正直前旅の仲間、小野寺ユウスケ・クウガより強い。

これは相当場数踏んでるな、と士は思った。

「チッ、予想より遥かにやりやがる！」

先の戦闘、大して苦戦もしなかったものの、多からずとも疲れてはいるのだ。ライドブッカーを取る隙もない相手に回避を繰り返していたが――

「クっ！クソっ！……！？がはあ！」

とうとうファムの剣がディケイドの胸を突き、ディケイドは吹っ飛ばされ、地に落ちた。

咄嗟に体を捻りながら身を引いた為にダメージは軽微だったが、プライドの高い士にはこたえた。

一瞬の後、すぐにディケイドは苛立たしげに地面を叩き立ち上がる。

「こいつッ！下手に出てりゃ調子に乗りやがって！」

言っているとディケイドは素早くカードを取り出し、

「覚悟しろ！一度叩きのめしてやる！変S…」

手の中でクルリと回したカードをディケイドライバーに挿入し——
ようとしたが、ディケイドは自分の持つカードを見て一瞬動きを止めてしまう。

そこが仇となった。

「おまえは危険だ」

——FINAL VENT——

電子音声に顔を上げると目の前には白い薙刀を持つファム。背後には——

「…おいおい」

——白鳥のミラーモンスター、『閃光の翼ブランウイング』が…。
ディケイドが避ける間もなく、ブランウイングは力強く羽ばたき、
ディケイドは薙刀「ウイングスラッシャー」をブンブンと振り回し
構えるファムに真っ直ぐに吹き飛ばされる。

「うあああああっ！？——ああっクソっ！こうなりや悪あがきだろうがなんだろうが！」

手足をバタつかせながら高速で飛来しながらもディケイドはカードをドライバーに挿入する。

——FORM RIDE——
——DEN—O AX——

一瞬白と黒のどうも鼻眼に見ても弱そうな状態、電王プラットフォームに、なったあと、熱いヒーローの様なメロディが流れ、赤い戦士に姿を変え、更に電子音が力強く輝くような印象の音楽を奏で、どこからともなく現れた鎧で堅牢な印象の姿になる。

黄色く、ゴツくなったディケイド。しかし、重くなったにも関わらず、吹き飛ばされる速さは殆ど変わらない。

そして、ファムは薙刀を大きく後ろに引き、

「はっ！」

ディケイドを斬りさいた。

ファムの必殺技「ミスティスラッシュ」がディケイドを捉えたのだ。

しかし電王アックスフォームにカメンライドした事が奏効したか、ディケイドは怪人の様に爆発はせず弾き飛ばされるに留まった。

地面に全身を強打し、変身も解除され、薄れゆく意識の中、士は何か違和感を感じていた。

「——これで良いんだ。これで私は……」

ファムはそう呟き変身を解除した。

契約モンスター、ブランウイングがミホをじっと見ている。その眼は限りなく優しくかった。

「また私を気遣ってくれるの？優しいのね。この前の蟹みたいな奴は契約者食べちゃったのに。あなた 何時もそう」

恐らく全てのミラーモンスターを探して回ってもこのブランウイングの様に契約者を労わるものはほとんど存在しないだろう。

モンスターとの契約とは己を食しに来たものと定期的な餌を約束し、共に戦ってもらう取引なのだ。

その間には信頼感はあるが、それは対価の餌の提供率に関してであり、それ以上のつながり合うものは無い。

実はミホには二年程戦いから逃げていた時期があった。通常これはモンスター側からすれば重大な契約違反に当たり、食い殺されること間違いなしである。

だがこのブランウイングはその二年にもじっと彼女を待ち、あまつさえミホを護るために命を懸けて戦ってさえいたのだ。

「有難う。もう、大丈夫だから……。さ、帰ろう」

ミホは携帯電話を開き、何処かへ電話を掛けるとゆっくりと歩き去った。

目を開くと土は清潔な何処かの柔らかい何か、というか、どこかの病室の思い切りふかふかのベッドの中にいた。

一瞬わけがわからなかった土は胸元が疼き、すべてを思い出した。

何時もなら激昂していたかもしれない。協力を考えていた所に襲い掛かり、あまつさえ必殺技すら使って来たこの仕打ち。しかし今はそんな事はなかった。

「態と、だよな…」

―あの技、どう考えても態と急所を外していた。

士とて歴戦の勇士である。分かるのだ。あの飛び方ならいくらでも息の根は止められる。寧ろあれだけデキる奴なら外すことこそ難しい。

「ふっ、何をじぶんを倒そうとした奴の事必死に考えてんだ？俺は。だいたい…」

といいつつも士にはなぜ自分が彼女を気にしているのか分かっていた。

カメラ集めの所以を語っていたときのミホの表情は、どこの世界でも見慣れた「自分探しの旅人」の表情だった。

―あいつは何を探しているのだろうか？

ふと士の脳内に、父や師の成し遂げられなかった志を受け継ぎ、自分の道を目指して懸命に戦っていた少年達がチラついた。

不意に士は視線を感じ、顔を上げた。

室内の鏡にあの白鳥「ブランウイング」がいた。

そいつは士をじっと見つめている。

「…やれやれ、どこの世界の物語も主役を待っちゃくれないか」

士は一人呟くと傍らの棚に置いてあるディケイドライバーとライドブッカーを手に取り、流れる様な動きでドライバーを装着し、カードを鏡の中からこちらを見る白鳥に見せつける様に構え、

「いいだろう、お前の主人、助けてやる。変身！」

と宣言した。

ビシッと回す。

ベルトにカードを挿入し、閉じる。

——KAMEN RIDE——
——DECADE!——

鏡に向かい立つ破壊者がそこに居た。

彼はライドブッカーを開き、バイクのエンジン音を轟かしてカードを取り出す。そして取り出したカードを少しの間見つめる。

「…ファムと戦った時もこうだったな…」

確かに前の旅のように色が落ちていたわけではないので、使えそうではあるが——

——「KAMEN RIDE」のカードが薄く黄色に発光しているのだ。

その変化に戸惑ったために先のファム戦は不覚をとってしまった。しかし、

「ま、状況が状況だから取りあえず使えればいいか」

気にするのをやめ、バックルを開き、カードを挿入する。

——K A M E N R I D E——
——R Y U K I!——

黒っぽい灰色の人影が二つ、二転三転しながらディケイドに重なり、赤き龍の騎士、仮面ライダー龍騎となったディケイドが現れる。

「なんだ、案外普通に変身できたな」

ディケイド龍騎はしげしげと己の姿を見た後、「フッ!」と一声あげると鏡の世界、ミラーワールドへと飛び込んで行った。

——白写機本店前——

「どうしたの？さっきの元気が無いじゃない？」

白いスーツを着た、妖艶な女性が声をかける。その後ろには色とりどりのワームがさまざまに鳴いている。

ファム・ミホは大苦戦を強いられていた。

如何に（半ば不意打ちの賜物であるとはいえ）ディケイドを倒したライダー、幾多ものワームを葬ってきたファムと言えど人間。体力にも限界がある。

ワームの圧倒的物量作戦はまさに体力の尽きを狙っていた。

肩で息をするファムに女性は涼しげに言う。

「だから始めに言ったじゃない？例のカメラをこちらに渡してくれれば何もしないって」

言いながら女性は顎でファムの後ろ、『白写機本店』を指し、無

言でワーム達に命じる。

すると女性の後ろにいたワーム達がファムの横を通り、店に押し入って行く。

「や、やめろ！くそつ、あぐつ、あああつ！」

ファムは通さんとするが、叩きのめされ倒れ伏す。

ワーム達は店内に入り、物色を開始する。

ファムは何も出来ずに倒れたまま。

「フフ、イレギュラーの破壊者さんを警戒して大勢で来たけど、あなたが倒してくれたからラッキーだったわ。でもこうも簡単にあなたが倒れたら暇になっちゃうわね」

余裕綽々で女性が言う。

「んゝ、気になってそうだから教えてあげるわ。何故我々があのカメラを欲しがるか、ね」

「ん…な、に…？」

ファムは苦し気だが、女性は構わず話し出す。

「あのカメラのレンズには、ある装置の設計図が刻んであるのよ。勿論、我々ワームにしかわからない暗号でね？その設計図が示すのは――」

「――もういい、大体わかった」

「「！？」」

女性の話を遮ったのはここには無い筈の声。

声のした方――白写機本店の方に顔を向けると、押し入ったワ―

ム達が次々と店内からブツ飛ばされていく。

その光景を創り出しているのは、右腕に赤い龍の頭、両肩に赤い龍の腹と脚を纏う赤き龍騎士、『仮面ライダー龍騎』となった仮面ライダーディケイドである。

最後の一体を右腕の赤龍の頭『ドラグクロ』で叩き出したディケイド龍騎は倒れ伏すファムの隣に立ち、ディケイドに戻る。

「ヒーローは遅れて現れる、てな？」

手を払いながら言うディケイドに、ファムが尋ねる。

「お前…門矢…どうして…？」

「どうして、か。そうだな、話を聞いてれば俺のせいでこんな虫だらけになったらしいしな。状況ややこしくしといて逃げるんじゃない俺の心底嫌いな何処ぞのこそ泥と一緒にだ。それだけはごめんだから、かな」

口調は別に心底と言うほど嫌いでも無さそうだが、言うディケイド。
ド。

すると静かな口調に怒りを滲ませて女性が言う。

「あら、破壊者さん、邪魔する気？」

ふん、と鼻で笑い、ことも無げにディケイドは答える。

「お前バカか？その気でなきゃお前らに攻撃なんかするかよ」

その答えに今度ははっきりと怒りを顕し、女性は言う。

「何故？何故邪魔をしようとするの？あなたに何の権利があって我

々の栄光へのロードをさえぎるの？」

「ならお前らには！何の権利があってこいつとこいつの親父の夢を壊そうとしてるんだ？」

「何！？」

「こいつは父から受け継いだ夢の為に、自分で一生懸命になれる事の為に借金をいくら抱えても化け物どもに襲われても必死にカメラを集めている。こいつのカメラにはこいつとその父の夢が詰まっている！それを奪う道理も、壊す権利も、お前らには無い！！」

「貴様…！」

もはやあの妖艶な顔を怒りに歪ませている女性は問答が終わるや否や姿を変貌させた。

真っ白な体。全身に棘があり、右腕が巨大な爪となっている。そんな怪物になっても女性的なものを失わないワーム、『ウカワーム』は、地獄の底から響く様な声で叫んだ。

『おのれえ！ならば貴様諸共そのファムと共に排除してくれよう！』
「性格変わってるだろうが…。ならその野望ごと、俺が破壊してる！」

「違う…！」

宣言するするディケイドをファムが否定する。

ディケイドが振り返るとファムが立ち上がっていた。

「何？」

「こいつらをやるのはお前じゃない…こいつらは！私が突き堕とす
！！」

ファムはブランバイザーをワーム達に突き出し宣言する。

「ふっ、そうかよっ！」

そしてディケイドとファムはワームの壁に突撃して行く。

「はあ！だあ！たああああ！」

「ふっ！はっ！たあっ！」

ワーム達に切り込んだディケイドとファム。

ディケイドはまだファムのファイナルベント「ミステイースラッシュ」のダメージが癒えていないにも関わらず負傷を感じさせない見事な動きでワーム達を殴り、蹴り、撃ち抜き、斬り伏せてゆく。

一方のファムも、先程まで倒れ伏すほどのダメージを負っていた筈が、今はまるで白鳥が舞うかの如くブランバイザーでワーム達を突き伏せ、斬り倒してゆく。

しかし流石に数が多い。段々距離を詰められ、とうとうディケイドとファムがワームの陣の真ん中に背中合わせで立つ状態になる。パンパンと手を払いながらディケイドはファムに話しかける。

「どうだ？そろそろバテてきた頃じゃないか？」

「バカを…はあ、はあ…いうなよ…はあ」

「気持ちいいくらいはつきりとバテてるだろうが」

呆れた口調で言いながらディケイドは辺りを見渡す。

ワーム達の中には脱皮している者も見受けられた。

―あれが全部クロックアップすると流石に厄介だな

士は考える。ケータッチがあれば恐るるに足りぬというものだが、

生憎光写真館に置いて来てしまっただけ今は持っていない。

「さて、どうするかな…」

しばし黙考し、ファムに声をかける。

「お前、どんなカード持ってる？」

「どんなくて…まあ、割と多種。ずっとぶんどって来たから」

「ぶんどって…まあいい、ならお前、高速移動出来そうなカードあるか？」

「え？これならあるけど…？」

言って差し出されるファムのカードは『ACCEL VENT』。なるほど、奪って来たというのも伊達ではない。

「よし、なら」

言いながらディケイドはライドブッカーからカードを取り出しベルトに挿入する。

——FORM RIDE——

「俺の合図でソレを使え。で、脱皮してる奴を集中的に狙え」

言いながらバツクルを閉じる。

——FAIZ AXEL——

ピピ、ピピ、ピピという音と共にディケイドの全身にベルトから出た赤いライン『フォトンストリーム』が走り、Φを顔にあしらっ

たスマートなライダー、『仮面ライダーファイズ』となる。さらに胸部装甲が縦に分かれ、がばっと開き、それが肩の位置に固定され、瞳部ライトが紅に、全身が黒に、『フォトンストリーム』が銀になり、『仮面ライダーファイズ・アクセルフォーム』への変身が完了する。

そしてディケイドファイズはさらにカードを取り出す。

「更に、これだ」

――ATTACK RIDER――
――AUTO VAJIN――

すると、例の銀のオーロラが現れ、スーっと移動し、消える。

その後にはディケイドそっくりな士の愛車『マシンディケイド』が現れる。が、それを認知するかしないかの内にマシンの先頭から発光し、スマートなバイクが現れ、更にソレがロボットに変形する。ファイズの愛車『マシンオートバジン』である。

その一連の流れを咄然として見ていたファムだが、ディケイドファイズが刃の赤く発光する剣をロボットから引き抜いたことで我に帰り、ワーム達を見る。

「ワーム達もそろいも揃って咄然とした雰囲気ですオートバジンを見詰めていた。」

「さて、いくぞ！」

「あ、ああ！」

ディケイドファイズは左手首の時計にあるボタンを押すと同時に、ファムはカードをバイザーにベントインする。

『Start Up』

刹那、ディケイドファイズとファムはワーム達の視界から掻き消えた。

ディケイドファイズは高速空間の中、オートバジンから引き抜いた剣『ファイズエッジ』とライドブッカー・ソードモードの二刀流で、オートバジンが開けた道からガンガンワーム達を斬り裂いてゆく。

ファムとて負けてはいない。こちらも高速空間からブランバイザーを振るい、ワーム達を次々と刀の錆びにしていく。

そして、クロックアップしたウカワームと激突する。

『人間風情がっ！我々ワームの踏みつける土にも劣るものがあああ！』

「確かにあんたら化け物と比べれば弱い！弱い！だけどっ！」

ブンツとブランバイザーを大きく一薙ぎ、ウカワームは飛び退き避けるが、そこにファムが肉迫する。

「その人間より遥かに劣るあんたらワームにだけは！言われたくないっ！」

『ぐああああああっ！！』

ファムの一太刀はウカワームの右腕を斬りとばした。

一方のディケイドファイズは、クロックアップした固体も含めてワームをある程度斬り裂いた後、そこらの一体をファイズエッジの鞘にし、カードを取り出す。

「さて、そろそろ幕引きだ！」

——FINAL ATTACK RIDE——
——FA FA FA FAIZ!——

「いくぜ…!」

『ディケイドライダー』が発声すると共に、パンパンと手をはたきながら半身になってワームたちを見据えるディケイドファイズの右足に、『フォトンストリーム』を伝って真紅の輝きが集まり、やがて一度キラリと瞬き、チャージが完了する。

「はあっ！」

気合一声、ディケイドファイズは空高く跳び上がり——

「っ!! たああああああああああっ!!」

下のワームたちに足向け、蹴り入れ、跳び、足向け、蹴り、跳び…を目に見えぬ速さで繰り返す。

ディケイドファイズが足向ける度に次々とワーム達に赤い円錐状のロックオンマーカ―が現れ、蹴り込むと共に片っ端からワーム達に突き刺さっていく。

やがて、電子音声が告げる。

『3. 2. 1. Time Out』

刹那、そこかしこでワーム達は爆散し、あたりには色とりどりの爆煙が立ち込めた。

「さて、どうだ？」

地面に降り立ち、ファイズから元に戻ってあたりを見渡すディケイド。残りは――まだまだいる。

しかし、ディケイドは文句一つ言わず、刃を撫でるとファムの隣に移動する。

何故か。それは目撃したからだ。

白き騎士が切り札を剣に挿入するのを。

――FINAL VENT――

電子音声が響き渡り、『閃光の翼』が飛来する。

白鳥が力強く羽ばたき、突風に吹き飛ばされたワーム達がこちらに飛来する。

薙刀を手を持つファムは隣に立つディケイドに警告する。

「間違えてお前を私が叩き斬っても文句は受け付けないぞ」

「余計なお世話だ。誰にもの言っている？」

「さあ？」

「フッ、通りすがりの仮面ライダーだ！おぼえておけ！」

――FINAL ATTACK RIDE――

――DE DE DE DECADE！――

ディケイドの前にカードが並ぶ。

そして、ディケイドとファムは各々得物を引き、迫り来る獲物に備える。

そして…！

「「はああああああああああああっ！」」

横に並ぶディケイドとファムは剣と薙刀を振り回し、飛来するワーム達の全てを巧みに両断してゆく。2人の後ろには絶える事なくワーム達の断末魔と爆炎が起こる。

『くっ！ここは一度…』

右腕を失ったウカワームは2人のライダーによる『ミステイースラッシュ』を見て、苦し気に眩き、退こうとする。
しかし、

『クエエッ！』

『ガフッ！？』

逃がすまじ、と言わんばかりにブランウイングの翼がウカワームを直に叩き、ウカワームも2人のライダーに向かって飛来する事となる。

それを前にし、ディケイドは言う。

「お前が決めろ！」

「言われなくても！フッ！」

ファムはウイングスラッシュャーを大きく振りかぶり、

「たああああああっ！」

真一文字に振り抜いた。

薙刀はそこには何もなかったかの如くウカワームの腹を通過する。

『おのれ、おのれええええ！ああああああっ！？』

断末魔と共に、ウカワームは爆発した。

ワームの煙が晴れた頃。

ディケイドとファムは向き合っていた。

「一応聞いとくぞ」

ディケイドはファムに声をかける。

「何であの時いきなり攻撃した？」

まだ疼く傷を撫でる様にディケイドは自身の胸を軽くはたく。

「巻き込みたくなかったから。流石にファイナルベントを当てたら戦いなんて出来ないだろうと思って」

ファムは心底申し訳なさそうに言う。

あの感じだと深入りしてくるだろうと思った事。

それで巻き込んでどうにかなっちゃうと申し訳ないと思った事。

倒せば敵と考え、自分の為に戦おうとは思わないだろうと考えた事。

「まさかあれだけ動ける程浅かったなんて。もう少し深く裂いとくべきだった？」

仮面の下でニヤリとしながら恐ろしいことを言うファム。ディケイドは変身を解きながら、疲れた声で言う。

「勘弁してくれ。本当に死ぬ」

崩れる様に座り込んだ士は頭を抱える。

ファムの変身を解いたミホは士に歩み寄る。

士は呟いた。

「多分この世界でおれがやるべき事は終わっ…ってないか」

ミホも呟く。

「何かお札に出来そうな事…」

士はミホを見やる。ミホも士を見遣る。そして一言。

「カメラ直せ」

「カメラ直す」

同時である。

ミホは一瞬まじまじと士を見た後、笑い出した
士はぼつの悪そうな顔でミホに言う。

「そうか、なら直せよ」

——白写機本店——

「ん？何だこれは？」

壊れたカメラを直してもらおうと一度戻った白写機本店内。

そこには、白い壁に向かって立つ古式の映写機があった。

これは…と士が思った通り、ミホが嬉し気な声を上げる。

案の定目を輝かせていた。

「スゲー！かなり古い型だよこれ☆。何でこんなと♪こ？に？っ」

言いながら映写機を覗き込み、手を伸ばすミホ。

何か色々おかしくなっているが、士は突っ込む気になれなかった。
―ああ、俺は一体何時になったら写真撮れるんだ…。
その時

「えっ!？」

ミホの声だ。

士が見やれば彼女は映写機に手を置いたまま、映写機の向いている壁を凝視している。
士もそちらを見ると―

―3…2…1…

昔懐かしい映画のカウントダウン映像の後、ある画像が浮かぶ。
士は僅かに目を剥く。
映し出されたのは―

―青空に悠然と立つ巨大な風車、それをバックに緑と黒の二つの人影がポーズをとっている―

異形に指を指す戦士がいた。

その戦士は体の半分ずつで色を変えていく戦士。
街を泣かせる者を追うその戦士は―

鳴滝は風車の上に立ち、一人呟いた。

「さあ、舞台は整った。

——今こそディケイドの第二の旅の始まりだ！」

（ 次回の仮面ライダーディケイドNEXTAGE（

「ここが次の世界か」

「お前の通りすがってるところどこだよ!？」

「変っ、身っ!」 「振り切るぜ」

「『さあ、お前の罪を数えろ』」

次回『旅人D／風呼ぶライダー』

破滅を破壊し、次へと繋げ!

燃える白鳥のカメオタ（後書き）

いやあ、ほんとすいません。

文にする難しさに目覚めて嫌になってたんだけどyoutubeで真ディケイド見たら覚醒したと言う…。

兎に角『始まりの世界』編、如何でしたでしょうか。

最後の、2人でミスティスラッシュは書き始める前から決まっていたが、どう繋げるか考える内ああいう形に。

まあ、楽しんで頂ければ幸いです。

まあ、一編終わったんで、御感想等待ってます。

6/29

ブラッディ

旅人D／風呼ぶライダー（前書き）

やっとう更新。

もうすぐ夏休みだからできるだけ進めてみようかな。

旅人D／風呼ぶライダー

「これまでの仮面ライダーディケイドNEXTAGE」

「幾つかの世界が再び破滅の危機を迎えている」

「ああ、俺のカメラが…」

「仮面ライダー…フナム…」

「ミホ。飛鳥ミホ」「カメラを集めるのは夢だから。私と父の」

「カメラは私が貰い受ける。」

「あれは我々ワームの栄光へのレッドカーペットなのだから」

「こいつは父から受け継いだ夢の為に、自分で一生懸命になれる事の為に必死にカメラを集めている」「それを奪える道理も壊す権利も、お前らにはない!!」

「今こそ、ディケイドの第二の旅の始まりだ!」

突如として店内に現れた映写機。

そこから放たれた画像は大風車と2つのシルエットという、次なる世界への掛け橋だった。

「新たな…世界…」

土の声。土はまじまじと画像を見た後、ミホを見た。そして一言。

「…俺、まーたこんな感じの女と旅しなきゃならないのか」

「…いや…てゆうか…何がどうなってるんだあ!?!」

ミホは風景の変わっている窓の外を見て、混乱の極みといった声

を上げた。

士は説明する。

「つまりだな、お前は俺の旅に巻き込まれたんだよ」

ミホは士を見て、問うた。

「旅ってお前…。」

なあ門矢あ！お前の通りすがってる所ってどこだよ！？」

問われた士は件の画像を指さして、ことも無げに答えた。

「世界だ」

約二時間経過後

「ほら、直ったぞ」

そう告げてミホはカメラを差し出した。

「ああ、サンキュ…って…なんだ…これは…」

士は礼を言って受け取ろうとしたが、途中で止まる。

「なんか文句あるか？破損前を完全に再現した筈だが」

まさにその通り、バラバラになっていた筈のカメラが、壊れてたなんて全く分からない程完全に直っている。

どうやら同型のジャンクを使って組み直し、塗り直したらしいが、

もはや職人技である。

「いや…オタクってのも捨てたもんじゃ無いなど」

「お代は払ってもら」

「だが断る」

「…それ直すの、結構」

「しかし断る」

「…おい、良い加減に」

「やはり断る」

「…やっぱお前もうちょっと深めに切れ込みいれとくんだったな…」

ミステイースラッシュ

———この世界の商店街———

「門矢、2つ3つ質問していいか」

「何が聞きたいか大体わかるが、取り敢えず先になんてお前が俺について来てるのか聞いていいか？」

「私は写真も好き、お前の近くならいい写真が撮れそう、じゃ駄目か？」

「だからってそんなプロ用のニコンカメラを首から下げてんなよ。邪魔くさいだろうが」

「それに…」

「？」

「異世界なら私の世界には無いレアカメラがあるかもしれない！いや、あるに決まってる！お前の近くならホイホイ来そうな気がするんだよ！文句あるか！」

「…おかしいな、全然別モンなのに何故かユウスケが見えた…」

士とミホはこの新たな世界に繰り出していた。

ミホはスタイリッシュなロングパンツに半袖Tシャツ、首から士

の様にカメラを下げている。ニコンの 中々にデカいやつが、女の中々にデカい胸やっの前でポンポン跳ねている。

対して我らが主人公、士はと言うと――

「そして聞くんが門矢、何時の間に着替えたんだ？」

――スーツだった。カメラは変わらず付いているが。

「さあな。俺は行く先々の世界で色んな役割を持たされる。警察、バイオリニスト、チーズ、じゃないチーフコック、黒子、何とかのジョー、草野球の選手等等。：後半自分で言っつて意味分からんな……」

「難儀なもんだな。世界の旅って」

士の説明を聞き、半ば同情的な視線を送るミホ。

「まあしかし俺は何着たって似合うからなあ。実際俺は自分の魅力の世界に教えられてばかりだ」

「気楽なもんだな。門矢の旅って」

士の独白を聞き、先ほどとは違う意味で同情的な視線を送るミホ。

「で、この世界での役割は――」

言いながら士は内ポケットから――ピンク色のカードを取り出そうとして慌てて引っ込め――黒い手帳のようなものを取り出し、ミホに向かって開いてみせる。そこにはなにやら着込んだ士の写真や「POLICE」の文字、登る朝日と日差しをかたどった意匠『旭日章』、いわゆる『日章』なんかがあった。

「――警察ってわけか」

「ああ。一度お巡りさんだったがカブリはギリギリ回避したということにしておこう。どうやらレパトリーなくなって来たようだな、旅を仕組んだ何者か」

街の風景を見ているとそこかしこに風車が見え、絶えず回っている。

子供達は元気に駆け回っている。

大人達は各々の時を生き。

士とミホはあちこち歩き回りながら景色をレンズに納めまくっている。

そこには『仮面ライダー』や『世界の崩壊』なんて物騒なワードは一切似合わない、和やかな時が、風に乗って流れていた。

「よし、次の質問いいか？ 門矢」

「ああはいはい」

「お前、何しに旅なんかしてるんだ？」

「そうだな…あえて言うなら『世界の全てをこのカメラに納める』が目的…かな」

「…言い違いじゃないか？ 『全ての世界をこのカメラに納める』じゃないか？」

「いや、俺は『世界の全てをこのカメラに納める』。その写真だけで『この世界だ！』って言える様な写真を撮る」

「そーかそーか、頑張れよ」

「…お前、結構ムカつくな」

男の子がサンタさんの格好をした男にの脛に蹴りを入れ、被害者は叫んだ。

ミホは写真をとる。

一陣の風が前を歩く2人の女子高生のスカートを捲る。

士は即座に写真を取り、ミホに引っ叩かれる。

アフロの男が女性に声をかけているのを視界の端に見ながら、ミホは士に尋ねる。

「じゃあ私達は今どこに向かってるんだ？」

「ああ、ここだ」

士は内ポケットから警察手帳を取り開き、見せる。

『風都署超常犯罪捜査課』

「『ふうとしょちょうじょうはんざいそうさか』、ねえ。

この街、風都って言うのか」

『ティーレックスッ！』

「らしいな。取り敢えずライダーに会えないと話にならんからな。

行ってみようかと…」

言いながら士とミホはアフロ男に声をかけられた女性が怪物になる様をカメラに納めた。

……………。

「今すっげえいい写真が撮れたな」

「ああ。余りにもありふれた日常だったな」

2人は顔を見合わせ、ティラノサウルスの頭に足が生えた様な怪物を見た。

アフロ男の叫び声が轟いた。

「ド、ドオパントオオオオオオオッ!?」

たちまちその場は大混乱になった。

混雑に吞まれ、士もミホもライダーシステムを取り出す暇もない。ミホは士を見失い、押し寄せる人の波に押され、転こけそうになる。

―ヤバイ!これで転けたら100%ミンチだ!

しかし、バランスを立て直せず倒れそうになる。

と―

「おおっとお、ご無事ですかお嬢さん?」

という声の主にミホは危うく救出された。

「:!!?ど、どちらさま?」

思わず尋ねたミホ。

その相手――黒いソフト帽を被り、キチツとした服装の青年――は、ソフト帽を被り直して気障な口調でこう答えた。

「おっと、これは失礼。私は通りすがりの探偵です」

混雑を抜けた士は怪物――Tーレックスドーパントと向かい合う男を見た。

鋭い双眸、硬く結んだ唇、髪はそれなりに整えられ、赤い革ジャンを着て、ラフかつスマートな佇まいは戦士としてのキャリアを見

せつける。

かなりの威圧感を放つその男は、士に一瞥を投げかけ、つぶやく様に言う。

「門矢：非番じゃなかったのか…。

…まあいい。そこでみていろ」

「まあたこんな偉っそうな奴が…：しかもまた俺は知らないのに相手は俺を知ってるパターンのやつか。

…やれやれ、ならお手並み拝見といくか」

士は偉そうな男の物言いにイラっときたが、おとなしく見学する事にする。

ドーパントと向かい合う彼は懷からバイクのハンドルみたいな物を取り出した。

それを両手で握り、一度腕を目一杯伸ばしてから腰にあてがう。

するとやはり、ソレから帯が伸び、ベルトになる。

男は、さらに懷から赤いUSBメモリそっくりな何かを取り出し、肘から上を回す様にしてメモリを掲げ、相手に見せ付ける。

そこに書かれていたのは赤い、スピードメーターにも見える『A』の文字。

男の指が、気持ちゆっくりとメモリの端子近くを押すと、メモリが発声する。

『アクセルッ！』

男は凄みを帯びた声で宣言した。

「変…身っ！」

彼はメモリをベルト化したハンドルに挿入し、ハンドルをグイン

グインと捻る。

『アクセルッ！』

その発声の後、ベルトを中心とした彼の周りにメーターの剣型の目盛りのようなものが円周上に浮かび、一瞬周りの景色が歪む程の高温を発したかと思うと、足から頭まで、細かい欠片が全身を覆うようにシステムが装着され、姿を変える。

「ほう…」

——オンロードバイクのような紅い身体、フルフェイスヘルメットのような頭には、青い円状の複眼と角の様に顔を覆う鋭利なA、尖った肩…そしてなぜか両足と背中に着いた車輪——

そう、風都を守護する片翼、『仮面ライダーアクセル』である。

アクセルはどこからか現れた剣、『エンジンブレード』を一度ブ
ンツと振りかぶり、

「振り切るぜ」

と言ったかと思うと、ドーパントへと突っ込んで行った。

怒涛。この一言がこのアクセルの戦いの全てを表している。

『加速の記憶』をもつ『アクセルメモリ』の強烈な熱、相手に反撃を許さぬ激しくダイナミックなアクション、手に持つ剣『エンジンブレード』や、そこに挿入する『エンジンメモリ』のもつ『エレ

クトリック』『スチーム』『ジェット』の三つの能力、といった様々な力を駆使して全くの無傷で戦っている。

「流石にみてろってだけはある、か」

その時、士はTーレックスの向こうに、逃げ遅れたらしい子供が倒れた机の影で隠れているを見付けた。

「チッ、厄介ごとを！」

舌打ちしても見捨てられない士は子供を救おうとするが、Tーレックスの跳ね飛ばした二つの瓦礫が、1つはアクセルの『エンジンブレード』を弾き飛ばし、もうひとつが、アクセルと全く反対方向にいた子供の方に飛んで行った。

その進行方向をみたアクセルは子供に気がついた。

「「このノーコンがあああ！」」

士とアクセルは同時に叫んだ。

士が駆け出す。

アクセルはベルトの『アクセルドライバー』を両手で持ち外し、胸の前に掲げた。すると、アクセルの背中の中輪が肩を掛けて前にせり出し、足は畳まれ、車輪が起動した。

「ひ、一人でファイナルフォームライドした！？オートバジンかアイツ！？」

驚愕する士。

ーブオブオブオブオオオンッー

「はっ！」

『仮面ライダーアクセル・バイクフォーム』となったアクセルはエンジン音も高らかに超高速で駆け抜け、子供の前に躍り出た。

「君！さあ、振り切るぞ！」

「はいいいっ！振り切りますううううっ！私全っ然聞いてないけど！ひいいいっ！」

ライダー状態に戻ったアクセルは子供に声をかけるとドライバールのマキシマムクラッチレバーを握る。

『アクセルッ！』『マキシマムドライブッ！！』

ベルトの発声と共にアクセルの複眼が光り、ドライバールのハンドルを捻る毎にアクセルが赤熱に輝く。そして発する熱はやがて右足に集まる。

アクセルは跳び上がり、足の踵側から蹴りかかる空中回し蹴り、必殺『アクセルグランツァー』を発動した。

足の通ったあとにはバイクタイヤのスキルしたような跡が走り、瓦礫は碎けるどころかアクセルの超高温によって溶けて消えてしまった。

アクセルは遅れて駆けつけた士に目配せした後、

「さあ、にげろ！ここにいたら絶望がお前のゴールだ！！」

と忠告した。

子供は頷き、「あ、ありがとうございました！」と言って、士に

誘導されて去って行った。

去って行った子供の方を見ていたアクセルは決着をつけようと振り返った。

気付けばアクセルの視界一杯にドーパントの巨大な顔、というか寧ろ巨大な口が広がっていた。

『余所見なんかしちゃって…いいのかしらアアアアアッ!!』

――

士が戻って来た時、アクセルは嘘のように大苦戦していた。

いまや動きにキレが全く無く、装甲はところどころが傷つき、ロボロだ。

そして今まさにTーレックスの頭突きに跳ね飛ばされ、苦し気に悶えていた。

Tーレックスはアクセルにとどめをさそうと歩み寄る。

「チッ、何があったってんだ!」

言ってカードを構える士。

その時。

凄まじい疾風が場を駆け抜けた。

風車がカラカラと凄まじいスピードで回り、ドーパントは怯み、アクセルは剣を地に刺して耐え、士は思わず目を瞑る。

士が目を開けた時、そこにいたのは――

――半分ずつ緑と黒に分かれたボディ、はためくマフラー。

赤い複眼は爛々と輝き、両手を軽く広げて佇んでいる。
銀の角と赤いベルトが示すそのライダーの名は――

「ようやくお出ましか。仮面ライダー…W！」

Wは気障キザに左手でドーパントを指さし、言い放った。
「『さあ、お前の罪を数えろ』」

〈 次回の仮面ライダーディケイドNEXTAGE 〉

「仮面ライダーならヒーローで、探偵なら嫌われ者、か」

「あいつもあのヤマの被害者なんだよ」

「都長殺人事件。風都史上唯一の未解決事件だ」

「Dを…破壊する。それが俺に託された意思だ」

次回『旅人D／ライダー探偵のお悩み』

破壊を破壊し、次へと繋げ！

旅人D／風呼ぶライダー（後書き）

7／15 18..04

ふむ、如何でしょうか？Wの世界編。

正直元が良すぎて破壊するに僥びなかったのですが、思い切ってやってみます。

自分で書いといてあれだけど都長殺人事件、できるかなあ…

頑張ってみますので、御意見御感想お待ちしております。

ブラッディ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5908/>

仮面ライダーディケイド～NEXTAGE～

2011年10月7日04時57分発行